

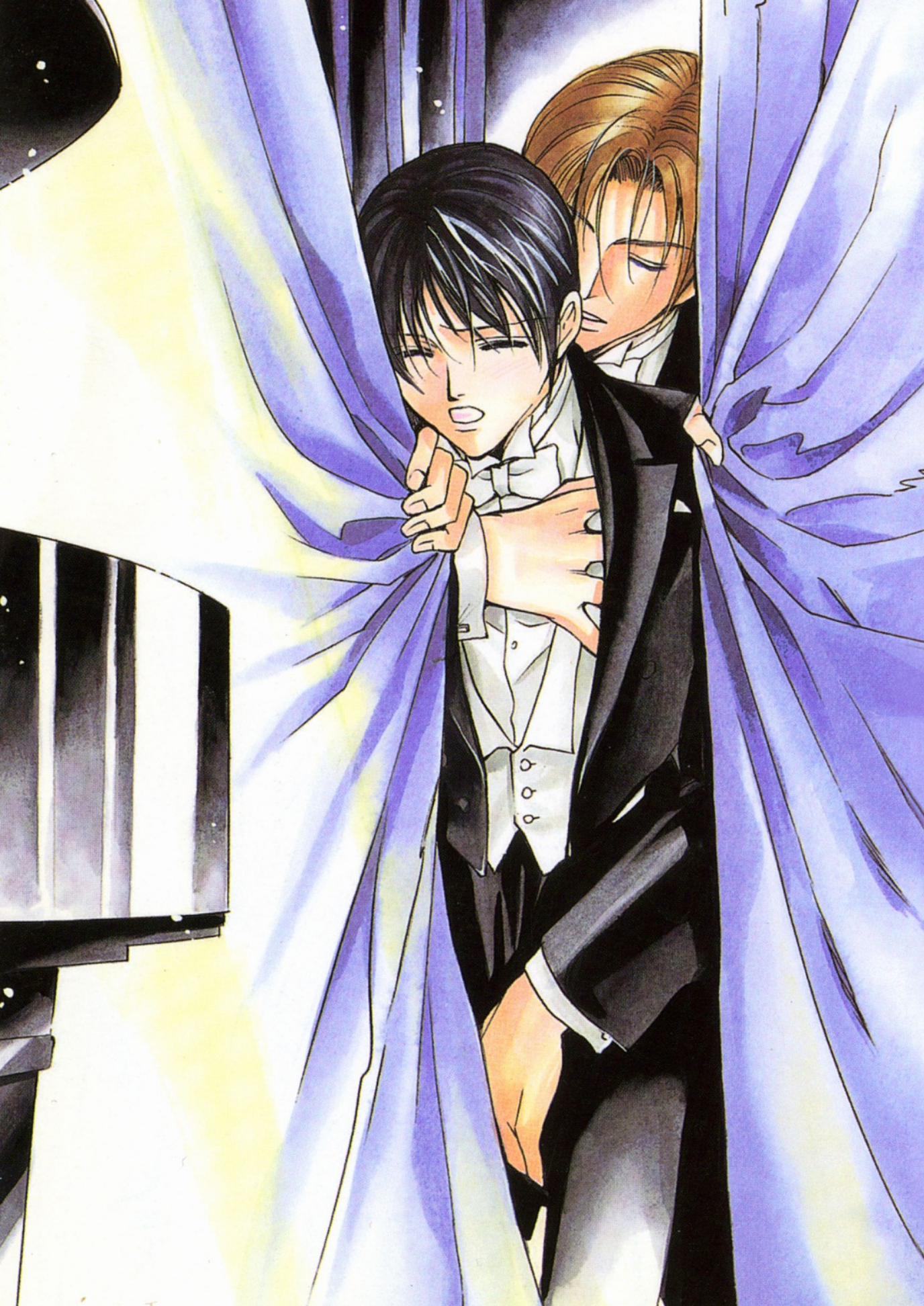
淫らな指先

FINGER TIPS

早瀬響子



Story Kyouko Hayase + Illustration Ryoka Oda



淫らな指先

《立読み版》

早瀬 響子

イラスト 緒田 涼歌

序

「——えっ……？」

誰もいないと思っていた、コンサートホールをのぞき込んだとたん、九条くじょうあきと暁人は思わず小さく声を上げた。

客席もすべて明かりを落とした中、なぜかステージのライトが一カ所だけともし、真下に置かれたグランドピアノと、その前に立つ一人の青年の姿を、ふわりと浮かび上がらせていたのだ。

一瞬、コンサートに出る人かな、と考え、すぐにそうじゃない、と思い直した。

このホールは、来月から暁人が通う、都内にある私立の芸術大学、青嵐学園音楽部の一角にある。暁人の祖母が経営し、学長をつとめるこの学園には、何度も来ているからわかるのだが、三月初めの今は、設備の点検などで閉まっているはずなのだ。

この日、念願の入学を果たし、その手続きに来た暁人は、すぐに帰るのがもったいなくて、春休みで人けの少ない広大な校舎をあちこち見て回っているうちに、ここまで来てしまっていた。

入り口には休館の札が出ているのに、ガラスのドアの鍵かぎが開いていたので、不思議に思ってこっそり

入ってみた。——そしてホールの中をのぞいたら、彼がいたのだ。

ほのかな明かりの中、立ってピアノを見下ろしているため、まっすぐな茶色の髪が横顔にかかっている。つきりしないが、自分より少し年上のようなのである。すらりと背の高い、やや細身の引き締まった身体を、古びた黒革のジャンパーとジーンズで包んでいた。

「……」

気がつくと暁人は、その姿に吸い寄せられるように、ドアのすき間から小柄な身体を滑り込ませ、客席に入っていた。薄暗い通路の中ほどまで進むと、そのまま、大きな瞳を見開いてステージを見つめる。

——と、こちらには全く気がつかない様子で、彼はジャンパーを床に脱ぎ捨て、洗いざらしのカーキ色のTシャツ姿になった。そして、ピアノの前の椅子に長い足を投げ出すようにして座り、ピンと背筋を伸ばすと、鍵盤けんぱんに手を置いた。大きな、指の長い手だった。

「——！」

暁人は思わず息をのんだ。次の瞬間、闇を切り裂く稲妻いなずまのようにそこからあふれだしたのは、正確で

明瞭なバツハの旋律だった。

今年、ピアノ専攻で入学する暁人には、それがなんの曲かすぐにわかった。

鮮やかに、八十八の鍵盤の上を自在に駆けめぐる二短調の響き。バッハ中期の名作、「半音階的幻想曲とフーガ」である。

左右の手がほぼ対等に旋律を奏でる、対位法という技法で書かれた、バッハの作品の中でも難しいはずの曲を、彼は完全に自分のものに行っているようだった。強靱な指は、確実な動きで鍵盤を操り、それを支える鍛えぬかれた腕と背中の筋肉が、薄いTシャツを通して、しなやかに動くのがわかる。けれど、暁人を呆然とさせたのは、彼の技巧ではなく、音、そのものだった。

正確で無駄のない指使いから生まれ出る音は、豊かで力強かった。けれどそれ以上に、全身で何かを欲し、しかもそれに焦がれているような激しさと切なさがあつた。それがバッハの、奔放で美しい幻想曲と、端正で緻密なフーガを紡ぎ出し、こよなく魅力的な音の世界を作り上げている。

——どうして、この人はこんなふうに弾けるんだろう……？——

うつとりと、旋律の中に身を委ねながらも、暁人は心のどこかでそう思っていた。音楽一家に生まれて、これまで肉親も含めて、ずいぶんたくさんさんの演奏を聴いてきた。けれど彼のそれは、今までのどのピアノリストよりも、自分の心に強く訴えかけてくる。心臓を、直に叩くかのように。

やがて曲は半ばを過ぎ、海に流れ込むまで勢いの衰えない河に似て、幾つもの旋律を重ね合わせながら、最後の一音に向かつて、激しさをさらに増していった。それにつれて、彼自身も身体を前に倒し、ピアノにのしかかるようにして鍵盤を叩いている。ピアノはまるで、そんな彼に応えるかのように、すべての弦を震わせ、高らかに鳴り響いていた。彼の髪が激しく揺れ、その先から汗がしたたり落ちた。

——そして、彼の仕草に引き寄せられ、思わず自分も身を乗り出した暁人は、その動きで、肩からバツグが滑り落ちるのに気がつかなかった。

「あっ……!!」

金具が座席にぶつかり、大きな音が響いた。

突然、曲が途切れ、彼がはっとしたようにこちらを見た。二人の視線がまっすぐに合う。不意に暁人は、どきんつ、と、自分の胸がこれまでと全く違うことで高鳴るのを感じた。

音の主は、その質素な身なりとは裏腹な、極めて端正で貴族的な美貌の持ち主だった。

やや尖り気味の顎あごに、形のよい薄い唇、つんと高い、通りすぎるほどに通った鼻筋。しかしその両脇のくつきりと二重に切れ込んだ、深い茶色の瞳は、目じりがつり上がって鋭く、見る者をはっとさせるような激しい輝きがあった。

その瞳で、彼はじつとこちらを見つめている。

いけない、邪魔あやましたことを謝あやまらなければ、と思いつつも、曉人はただ、彼の姿に見とれてしまっていた。その強い眼差しが、まるで自分を射抜くかのようで、全く動けないままだった。



—その時、

「おい！ 誰かいるのか？」

ホールの係員の声が、裏の方で聞こえた。

次の瞬間、彼は素早くピアノに蓋をし、上着を取り上げて、あっという間に舞台袖に消えてしまった。流れるような仕草だった。それと同時に、ステージの明かりがふっと消えて真っ暗になった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

淫らな指先

《立読み版》

発行日 2011年10月14日

著者名 早瀬 響子

イラスト 緒田 涼歌

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。